西洋建築史第4回

中世1－カテドラルの時代

中島 智章

序.ヨーロッパの封建制

●ゲルマン民族大移動(～375～568～)

→東西ゴート族、ヴァンダル族、ブルグンド族、フランク族、ロンゴバルト族・・・

西ゴートのアラリクス、東ゴートのデオドリクス、フランクのクローヴィス(メロヴィング朝、486-751)

●ローマ教皇とフランク国王の協力

→ロンゴバルト族の打倒と教皇領の成立＝小ピピン寄進(754)

→西ローマ帝国の復興＝**Carolus**(Karl大帝、Charlemagne)戴冠(800)

●カロリング朝分裂＝ヴェルダン(843)、メルセン(870)条約

→西フランク王国(～987)、中央帝国(～875)、東フランク王国(～911)

→各カロリング朝の断絶→諸侯(公、伯、副伯＋大司教、司教)の勢威が増す

西フランク王国→カペー朝(987-1328)：Hugue CAPETの頃は一地方勢力に過ぎなかった

→フランス王国へ(Philippe II、Louis IXなどの諸王の力で王権強化)

ロタリンギア(Lotharの国)→ロタールの死後、解体へ

→ロレーヌ(ロートリンゲン)公国、フランシュ＝コンテ(ブルグンド自由伯領)、イタリア諸侯国

東フランク王国→選挙王政→Otto Iが神聖ローマ帝国皇帝に(962)

→神聖ローマ帝国の枠組(現在のドイツ・オーストリアを中心としてその周囲にも及ぶ)

→しかし、近代まで領邦国家の集合体に過ぎず

1.教会(教会堂)の種類

●カトリック教会の位階：

教皇(pape)＝聖使徒ペテロの後継者→枢機卿(cardinal)＝教皇選挙の選挙権と被選挙権

→大司教(archevêque)と司教(évêque)＝地方組織の長→主任司祭(curé)　＊神父と牧師

●聖座＝使徒座のある聖堂(使徒座聖堂)

→司教座聖堂(cathédrale)＝司教座(cathedra)のある聖堂→参事会聖堂(collégiale)→教区教会堂(église paroissiale)

＊バジリカ聖堂(basilique)と大聖堂

●邦語表記→現地語に近いカタカナ表記：聖ペテロ→サン・ピエトロ(伊)、サン・ピエール(仏)、ザンクト・ペーター(独)など

2.ロマネスク建築の勃興

●至福千年説の超克

農業生産や都市活動の勃興＋石造ヴォールト建設術の復興

→円筒ヴォールト、交差ヴォールト、ベイによる構成、ラテン十字形

●壁面の構成：arcade＋trifonium＋clerestorey

平面の構成：nave，aisle，transept，choir，apse

1)フランスのロマネスク：アプス(内陣)を取り巻く放射状祭室、巡礼路に沿って点在、クリュニー修道院などの建築

ラ・トリニテ聖堂(カン、1062-66頃)、サン・セルナン聖堂(トゥールーズ、1080頃-)

ダラム大聖堂(1093-)：ノルマン式＝rib、ラ・マドレーヌ聖堂(ヴェズレ、1120-60頃)：交差ヴォールト

＊サンティアゴ・デ・コンポステーラ聖堂(1075-1122)→巡礼路終点

2)イタリアのロマネスク：基本的平面はバシリカ式を踏襲、柱頭の繊細な彫刻、鐘楼と円形の洗礼堂が独立に建てられる

サンタ・マリア・コスメディン聖堂(772-95)、サン・ミニアート・アル・モンテ修道院聖堂(フィレンツェ、1018-62)

サンタ・マリア司教座聖堂（ピサ、1063-1118-、洗礼堂・鐘楼→1152-1275）

サンタンブロージオ大聖堂(ミラノ、1098-1128)、パルマ司教座聖堂(洗礼堂、1196-)

3)ライン川沿いのロマネスク：二重祭室、菱形を組合せた屋根の尖塔

シュパイアー大聖堂(-1061-)、マリア・ラーハ修道院聖堂(1130-56)

ザンクト・ゼバルド教区教会堂(ニュルンベルク)、ヴォルムス大聖堂(1171-)

シント・セルファース大聖堂、聖母聖堂(オンゼ・リーヴェ・ヴロウウェケルク)(マーストリヒト)、サン・バルテルミー参事会聖堂(リエージュ)

●都市の司教座聖堂などは後にほとんどゴシック様式で再建され、かろうじて地下祭室(クリプト)の形でみることができる

3.ゴシック建築の誕生－サン・ドゥニ修道院聖堂－

●仏王ルイ7世(Louis VII)＋スゲリウスまたはシュジェール(Sugerius，Suger)

→王家の菩提サン・ドゥニ修道院教会改築(1136-44)→ステインド・グラスと光

①**pointed arch**＝二つの円弧を組合わせたアーチ

②**rib vault**＝石造ヴォールトの骨組のようにみえる

③**flying buttress**＝身廊の壁体を横から支える

→壁体を薄くし、開口部を広くとってステインド・グラスを施す←高度な切石・組積技術の下地

＊pier(ピア)(細い柱が束になったような姿)、pinnacle(ピナクル)(尖塔)、gargoyle(ガーゴイル)(怪物の形をした樋)

1)パリのゴシック聖堂：**ノートル・ダム司教座聖堂**(1163-1250)、サン・セヴラン聖堂

2)イル＝ドゥ＝フランス地方：都市の栄光をになう司教座聖堂←農業生産量の拡大と都市人口増　＊tribune(トリビューン)付4層→3層

ラン(1155-1230)、シャルトル(1194-)、アミアン(1220頃-)、ボーヴェ(1247-72頃)→高さ約48mを達成したが崩落→未完成

＊ランス司教座聖堂(1210-)：植物の葉を装飾的に用いたtracery(トレーサリー)→フランス国王の戴冠式、「王の奇跡」＝瘰癧さわり

3)王室の礼拝堂→Louis IX(ルイ9世)(Saint Louis(聖ルイ))のサント・シャペル礼拝堂(1243-1308)：単廊式→ヴァンセンヌ城塞付属礼拝堂

アーチ開口部の石造の枠＝tracery(トレーサリー)の発達：lancette(ランセット)（12世紀)→rayonnant(レヨナン)（13世紀)→flamboyant(フランボワイヤン)（火炎式、14世紀-）

4.聖母信仰と「石の聖書」としてのカテドラル－パリのノートルダム司教座聖堂－

●portail(ポルタイユ)(彫刻や装飾を施された大きな入口)などの彫刻＋ステインド・グラスの図像主題

ex. サント・シャペル→創世記から最後の審判まで

→大聖堂を寄進した同業者組合の職人たちの図像が挿入されることも

●パリのノートル・ダム大聖堂

聖母のポルタイユ

最後の審判のポルタイユ→最後の審判を中心のポルタイユに置くという流儀

聖アンヌのポルタイユ

●シャルトルのノートル・ダム大聖堂

キリストの三様の姿→パリのノートル・ダム大聖堂などへ影響

北の薔薇窓：旧約聖書の世界と聖母子

南の薔薇窓：新約聖書の世界とキリスト受難

西の薔薇窓：最後の審判

●エミール・マール(Émile MÂLE)：『ヨーロッパのキリスト教美術 12世紀から18世紀まで』(2冊)、柳宗玄・荒木成子訳、岩波書店、1995年